

『男はつらいよ』、主題歌は寅さんの風貌と名調子をいつだって呼び起こす

昭和歌謡 誕生物語

第④回
文・山川智

メロディーが流れてくると情景の浮かぶ歌謡がある。映画の主題歌だからこそその力であるのか。

『男はつらいよ』はそんな歌の代表格だ。

イントロ「わたくし、生まれも育ちも葛飾柴又です」と寅さんの名調子が流れると、それだけで人情味あふれる不思議な映像世界へ誘って行く。

不思議な世界は当世映画にとどまらなかつた。

柴又八幡神社古墳で、帽子を被り、細い目の寅さんそっくりの植輪が出土したのだ。

2001年8月4日のこと、その日は奇しくも
渥美清五回目の命日だった。

故 渥美清さん扮する人
情味溢れるキヤラク

ター「フーテンの寅」で親しまれた国民的人気映画『男はつらいよ』は、元々フジテレビ系で始まったドラマだった。

ハブ狩りで一儲けしようと奮美大島に出かけた寅次郎がハブに噛まれて死んでしまう――そんな最終回に視聴者から抗議の電話が殺到、これが映画化に繋がったことはよく知られる話だ。

作詞を担当した星野哲郎さん

んは、水前寺清子の「365歩のマーチ」をはじめ、都はるみの「アンコ椿は恋の花」や北島三郎の「函館の女」などの作詞でお馴染の大御所。そんな星野さんのもとへ主題歌依頼があったのはドラマがスタートする昭和43年のことだった。

あらすじは「愚直賢妹」というサブタイトルが表すとおり、賢い妹と愚かな兄をテーマにした人情喜劇。だが、プロデューサーからの注文は、「物語がどう展開しても良いよう

に書いていただきたい」という、いたってザックリしたものだったという。

そこで頭を抱えた星野さんは「寅さん」を、「喧嘩早くて、一生懸命。でも、やることなすことうまくいかない大変な人」と頭の中でイメージした。「ガンバレ、ガンバレじゃなく、一生懸命やっても、うまくいかない。そのちくはくさに寅さんの人生がある。そこが聴く人ごとの人生と一緒に走ってくれる応援歌になるんです」(星野さんのインタビューより)。すると、あの有名な「奮斗努力の甲斐もなく」という歌詞の1節が浮かんだという。

どうしてもイントロ部分の長さが気になる。そこで渥美さんがアドリブで「生れは葛飾、柴又の帝釈天の産湯で育ち、姓は車、名は寅次郎、人呼んで……」(後に「わたくし生れも育ちも葛飾柴又です……」に変更される)という口上を挿入すると、これが驚くほどにピッタリハマるではないか。ただ、即興だったため星野さんに事後承諾だったのだとか。

発売されたシングル「男はつらいよ」は38万枚のロングセラーを記録。今でも、あのメロディーに乗って寅さんの歌声が流れると、なんとなく切ないような、ほろ苦い思いに駆られる不思議な名曲である。

完成した歌詞は作曲家・山本直純さんに手渡され、いよいよレコーディングがはじまった。ところが、できあがった曲を聴くと、

完成した歌詞は作曲家・山本直純さんに手渡され、いよいよレコーディングがはじまった。ところが、できあがった曲を聴くと、

完成した歌詞は作曲家・山本直純さんに手渡され、いよいよレコーディングがはじまった。ところが、できあがった曲を聴くと、

